全海運所属組合の横顔
連載　第 11 回
九州地方海運組合連合会
その 5　大分県海運組合

【組合の概要】

事　務　局　◇大分本部
〒 870-0932
大分県大分市東浜 1-4-12　晃亜ビル 205
電話・FAX 097-599-5655
JR 大分駅前より大分バス三佐行きで運輸支局前まで 15 分。バス停の目の前
◇佐伯支部
〒 876-0815
大分県佐伯市野岡町 1-5-11
電話・ＦＡＸ 0972-22-1446
JR 佐伯駅から徒歩 8 分

理　事　長　松本　雅彦　松盛汽船㈱代表取締役社長

事務局員　大分本部　上村（うえむら）　裕子
佐伯支部　松尾　英子

組合員数（平成 30 年 3 月 31 日現在）

運送事業者	5 社
貸渡事業者	27 社
利用運送事業者	2 社
合　　計	34 社

所属船腹量　50 隻　26,120 総ﾄﾝ　65,587 重量ﾄﾝ㎥ PS

松本理事長

大分本部（Google マップ）

佐伯支部（Google マップ）

【組合の組織】

大分県海運組合の役員は理事長 1 名と副理事長 3 名、理事 12 名、監事 2 名で構成される。年 1 回の総会と 2 回の理事会の他、数回の役員会を開催。毎年、津久見地区海運組合との合同協議会を昭和 62 年（1987）より開催している。

また、平成 20 年（2008）3 月に設置された佐伯海事地域人材確保連携協議会に参加している。地域に集積された海事産業・文化の活性化に取り組み、青少年の海への関心の高まりを通じた海事関係の人材確保や特色のある海事地域の形成を図るための活動が主な事業。「海の日」の海事産業の周知、高校生への就職説明会など、特に若い世代には内航海運業の周知を図り、職業として船員を選択してもらえるようＰＲ活動を続けている。

大分県の海運企業は大分市内、佐伯市内、津久見市内に多く、大分県海運組合では後述の県下4地区組合合併の際、大分市内に本部を置くと同時に、旧佐伯地区海運組合のあった佐伯市内に佐伯支部を設置している。

本部事務局はJR日豊本線大分駅前から大分バスの三佐行きで運輸支局前まで15分。下車すると大分運輸支局と臨海産業道路をはさんだ目の前の晃亜ビル2階にある。新日鉄住金大分製鉄所も直ぐ近くにある。

佐伯支部はJR日豊本線佐伯駅から国道388号線を徒歩8分。国道を挟んだ対面に日本文理大学付属高校のグランドがある。佐伯港にも近い。

構造改善から4地区組合が統合

【大分県の海運】

福岡県との県境にある中津は、江戸前期（1600年代）から周辺の日田天領の御城米（ごじょうまい）（年貢米）を江戸に送り、漁獲物などの産物を大阪に送ることから、海運業が発達して行った。さらに、佐伯港から参勤交代で江戸に向かう大分、宮崎、鹿児島地方の大名が海路をとったといわれ、戦前には連合艦隊の基地でもあった。

また、大分県南東部の蒲江町では、古くから海運業を生業にしてきた者が多く、地元の伝承によれば、源平時代（1100年代）に紀州から移り住んだ「七軒株」のひとり、佐藤氏の子孫である喜三郎が明治初期、本格的に海運業に乗り出したとされる。明治から大正にかけての海運活動は干魚、干甘藷など地元特産品を瀬戸内方面、特に尾道に積み出し、イグサ、素麺（そうめん）などを復荷にした。また、南九州の焼酎の輸送にも当たった。

【大分県の地区組合事情】

大分県下には元々、生い立ちが異なる大分地区海運組合（大分市）、佐伯地区海運組合（佐伯市）、蒲江地区海運組合（蒲江町）、香々地地区海運組合（西国東郡香々地町）、津久見地区海運組合（津久見市）の5地区海運組合があった。それが昭和59年（1984）6月の運輸省（現国土交通省）の内航海運業構造改善指針通達により61年（1986）4月、地元に海運支局がある津久見地区を除いた4地区海運組合で合併し、大分県海運組合が発足した。このとき運輸省は、事業者数の適正化を示すとともに、原則として内航海運組合を都道府県以上の単位、最小でも海運支局単位に再編成し、年間の財政規模も最低1,000万円とする方針を打ち出していた。大分県下の5組合ではこの線に沿って検討を重ね、その過程で一本化に難問もあったが、関係者の協力と支援で4地区組合の合併が実現した。このときに大分県海運組合は所在地を最も組合員数の多い大分市に置き、これに次いで組合員数の多い佐伯市に支部を置いた。その後、平成5年（2017）3月に蒲江町が佐伯市と南海部郡5町3村合併で佐伯市となり、香々地町が豊後高田市、真玉町と合併して豊後高田市となっている。

大分港大在・日吉原地区（写真提供：大分県土木建築部港湾課）

佐伯港蒲江竹野浦河内（写真提供：PIXTA）

大分県海運組合に統合した4地区組合の地域性と特長に触れておこう。

県庁所在地でもある**大分地区**は、県下で1番の大世帯

で組合員のうち約半分を占める。戦前から地元産の松材、木炭などを瀬戸内や阪神向けに輸送していたが、大部分の船主が兼業農家といわれ、規模的にも零細性が強かった。組合の設立は昭和30年（1955）4月、任意団体・大分地区機帆船組合が始まりで、35年（1960）7月に大分地区木船海運組合に組織替え、38年（1963）4月に大分地区海運組合に改称している。

佐伯地区は古くから東九州の良港といわれ、豊後水道を隔てて瀬戸内、阪神に近いという立地条件であるため海運は古くから栄え、組合員の中には先祖代々から家業として受け継いだ者が多い。戦前から木炭、パルプ原木を阪神、瀬戸内海方面に機帆船輸送したが、戦時中の機帆船徴用、戦後の燃料油統制など多くの変遷を経て、海運が栄えてきた。しかし、一杯船主が多く、地元に貨物がないため京浜、阪神のオペレーターに所属している船主が多い。昭和21年（1946）には佐伯地区機帆船組合、佐伯地区機帆船㈱の設立などを経て、33年（1958）8月に組合員30名で佐伯地区木船海運組合を設立。38年8月に佐伯地区海運組合に改称している。

昭和33年の木船組合発足当時、組合員の資金繰りが極度に悪化したため、無尽（むじん）会社（のちの相互銀行）から高金利悪条件を飲まされ、窮地に陥る業者が多かったが、34年（1959）5月に商工中金大分支店との取り引き開始に漕ぎつけて以来、実績を重ねて高金利の一掃に努力する一方、経営の合理化に努めた。こうした実績が県下の各金融機関の評価を得て、船舶近代化の大きな原動力となった。

蒲江地区は宮崎県と県境で、山地を控えて古くから海運業を生業にしてきた船主も多かった。地元に貨物がないため県外に進出した船社がほとんど。昭和32年（1957）6月に組合員17名で蒲江木造貨物船海運組合を設立、37年（1962）5月に蒲江地区海運組合に改称した。

香々地地区は国東半島の中央北部に立地し、周防離に臨み、地形的には数条の丘陵が西走し山林が多い。戦前戦後を通じて薪炭、木材、竹材などの特産品を瀬戸内方面に積み出し、戦後の最盛期には30数隻を抱えるほどであったが、現在はその面影がない。組合設立は昭和21年の香々地地区機帆船組合が始まりで、24年（1949）に国東半島5地区を網羅した国東半島機帆船輸送㈱を設立したが、30年（1955）に解散。次いで同年、香々地三浦船主協同組合を設立するなどを経て、39年（1964）6月に香々地地区海運組合となった。

大分県海運組合本部の入居するビル（上）と事務局

大分県海運組合佐伯支部の入居するビル（上）と事務局

九州運輸局大分運輸支局

大分県下では昭和40年(1965)に新日本製鐵(現新日鉄住金)が大分に製鉄所を建設することが確定したこと伴い、その海上輸送に対応するため県内の内航事業者等13社が発起人となり同年4月に大分共同海運が設立された。それとともに県下の内航海運業界では経営の合理化と船舶の鋼船化が進み、ようやく斜陽に歯止めがかかった。しかし、昭和49年（1974）のオイルショックのあおりから事業者は弱体化し、平成10年（1998）の内航海運暫定措置事業開始前後に一杯船主が次々と廃業して行った。

大分市街地と日鉄住金大分製鉄所

地区組合合併当時の組合員は約135社だが、平成30年（2018）3月31日現在34社と4分の1に激減している。旧地区組合別にみると大分地区が63社から15社、佐伯地区が50社から14社、蒲江地区が12社から3社、香々地地区が10社から2社に激減している。また、現在の組合員数を業種別にみると運送業が5社、貸渡業が27社、利用運送業が2社。所属船舶を船種別にみると貨物船42隻（56,225重量㌧）、油送船3隻（4,166㎥）、艀1隻（315重量㌧）、バージ2隻（4,054重量㌧）、プッシャー2隻（527PS）の50隻（65,587重量㌧㎥PS）となる。

大分県下の臨海部に位置する大手産業は新日鉄住金大分製鉄所、昭和電工大分コンビナート、JXTGエネルギー大分製油所、パンパシフィック・カッパー佐賀関製煉所、太平洋セメント大分工場、ダイハツ九州工場などがある。

大分県の海の守護神

【文化と伝承】

宇佐神宮

宇佐神宮は、大分県宇佐市にある神社で、全国に約44,000社ある八幡宮の総本社。石清水八幡宮、筥崎宮（または鶴岡八幡宮）とともに日本3大八幡宮のひとつとされている。古くは八幡宇佐宮または八幡大菩薩宇佐宮などと呼ばれた。また、神仏分離以前は宇佐八幡宮弥勒寺と称していたが、現在でも通称として宇佐八幡とも呼ばれている。古くから海上安全祈願の神社として知られ、「宇佐神宮 海上安全 守護」の木札がある。

大分県北部国東半島付け根に立つ御許山（おもとさん）（標高647 m）山麓に鎮座し、本殿は小高い丘陵の小椋山（おぐらやま）（標高35 m）の山頂に鎮座する上宮とその山麓に鎮座する下宮とからなり、その周りに社殿が広がっている。境内は国の史跡に指定され、本殿3棟は国宝に指定されている。参拝は一般の「2拝2拍手1拝」と異なり、出雲大社同様に「2拝4拍手1拝」を作法としている。2拍手は「慎しむ心」と「拝み、お頼みする」心を表わしたものとされているが、4拍手は「人と神の魂」である「1霊4魂」を表現しているといわれている。

宇佐神宮上宮本殿（左）と海上安全の守護札

宇佐神宮の南に立つ御許山山頂には奥宮として3つの巨石を祀る大元神社があり、豪族宇佐氏の磐座信仰が当初の形態であろうともいわれ、そこに辛嶋（からしま）氏が比売大神（ひめおおみかみ）（一説に卑弥呼と同一人物とされる）信仰を持ち込んだと考えられている。

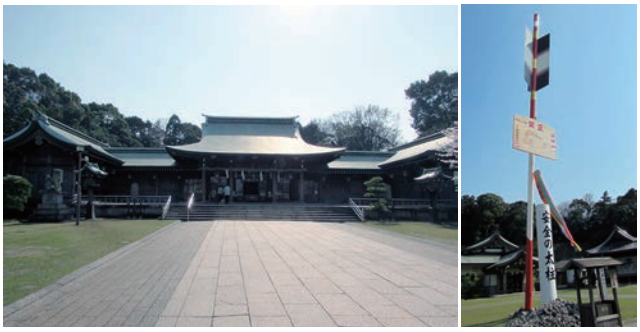
奈良時代以降は、和銅5年（712）に官幣社となり、口伝によれば辛嶋勝乙目（からしますぐりにおとめ）が祝（はふり）（神主）、

一族の辛嶋意布売(おふめ)が禰宜(ねぎ)となって栄えたとされる。勝乙目は、父方が中国の西周王家の流れをくみ、母方が釈迦と関係のある部族の血をひいている女性呪術師で、仏教・ユダヤ教・道教を携えて日本に渡ってきた東西随一の学者であったと伝えられるが、意布売(おふめ)の出生は不明である。社殿は、宇佐亀山に神亀2年(725)に一之殿が造営された。以後、天平元年(729)に二之殿、弘仁14年(823)に三之殿が造営されて現在の形式の本殿が完成したと伝えられ、いずれも国宝である。平安時代中期の『延喜式神名帳』には、3神が「豊前国宇佐郡 八幡大菩薩宇佐宮」、「豊前国宇佐郡 比売神社」、「豊前国宇佐郡 大帯姫廟神社」として記載され、いずれにも列している。名神大社(みょうじんたいしゃ)とは日本の律令制下で名神祭の対象となる神々(名神)を祀る神社で、古代における社格の1つとされ、その全てが大社(官幣大社・国幣大社)に列していることから「名神大社」と呼ばれている。

上宮本殿は「八幡造」様式で、2棟の切妻造平入の建物が前後につながった形をとる。奥殿は「内院」、前殿は「外院」といわれる。内院には御帳台(祭神の夜の座所)があり、外院には御椅子(昼の座所)が置かれている。

大分県護国神社

大分市内の海運企業が海上安全を祈願するもうひとつの神社が護国神社。大分県初代県令森下景端が慰霊顕彰のために明治8年(1875)10月、松栄山(海抜82m)に「招魂社」を創建した。このとき祀られたのは前年の佐賀の乱、台湾出兵、幕末の蛤御門(京都御所)の戦いで戦死・病死者だったが、その後に明治10年(1877)の西南の役とその前年の熊本神風連の乱の戦死者や日清・日露戦争、シベリヤ出兵、欧州大戦、満州事変以降の第2次世界大戦などの全ての戦没者が祀られた。昭和14年(1939)4月に大分縣護國神社と改称し、第2次世界大戦の終戦時まで、代々の県知事が神社の奉賛会長をつとめ、県民の奉賛を得てきた。境内からは大分市街地から別府、国東半島、晴天の日は遠く四国も望むことが出来る。また、境内には縦3m、横5mの九州最大の毎年の干支を描いた大絵馬と、高さ11.2m・重さ600kgの日本一の大破魔矢が「安全の太柱」の脇に飾られている。



大分県護国神社本殿(左)と大破魔矢・安全の太柱

五所明神社

佐伯市の海運企業が海上安全祈願するのが平安時代の大同元年(806)創基の歴史がある五所明神社。県の天然記念物に指定されている那岐(なぎ)の木は、樹高約22m、胸高周長は2.4mを越えている。祭神は加茂・春日・稲荷・住吉・梅之宮の5神社の分霊を勧請したところから五所大明神社と称するようになった。

五所明神社本殿

享保5年(1702)に毛利藩主より「練りもの行列」を出すよう通達があり、臼坪・中村・内町・船頭町に山車が出来た。拝殿は享保元年(1716)、神殿は享保6年(1721)竣工したが、両殿は慶応元年(1865)に焼失し、神殿は明治25年(1892)、拝殿は明治32年(1899)に落成し現在に至っている。善神宮は正徳元年(1711)の造営で約300年前の建物そのままである。

取材こぼれ話

その 1. 大分県の桜と地形

大分空港から大分市内に向かって大分空港道路を走り、見事な桜並木に出会った。総延長 2km ほど続いた。取材に訪れた 3 月 28 日に丁度満開で、並木の手入れも行き届いていた。自動車専用道路のため、折角の風景も停止することが出来ずに車窓から眺め、フロントガラス越しに撮影するしかなかった。

大分自動車道の桜並樹

大分県は桜の名所が多いそうで、前述の宇佐神宮、大分県護国神社や大分城趾、臼杵城趾、杵築城趾、中津城趾などがあげられるが、県の総面積 6,339.75㎢のうち森林面積比率が 71.5％を占めるだけに、車窓からみる山桜も見事だった。別府温泉や由布院温泉などの源泉数が 4,538 カ所、湧出量毎分 291,340 ℓ で“日本一のおんせん県おおいた”がキャッチフレーズだが、このときばかりは、“桜の里”といってもよいと思った。

ちなみに大分県の地形は、北東部が中央に標高 720 m の両子山（ふたごさん）がそびえ、“九州のこぶ”といわれる国東半島が瀬戸内海に突き出し、北西部は英彦山（ひこさん）系、西部は九重連山（くじゅうれんざん）、北部は祖母山（そぼさん）系の山々が連なっている。四国と対峙する東部が豊後水道に沿って日豊海岸国定公園に指定される景観豊かなリアス式海岸で、北部から西部は瀬戸内海に面し、佐賀関半島の突端から四国の佐田岬まで豊予（ほうよ）海峡を挟んで最狭部が約 10km の至近距離。大分平野を始め中津市や佐伯市などの平野部も多く、また内陸部には日田市や由布市（由布院温泉）、玖珠（くす）郡玖珠町、竹田市などの盆地もみられる。大分県は複雑な地形からトンネルの数が 494 本と日本一である。

その 2. ホーランエンヤ

大分県豊後高田市には毎年正月、豊漁と航海の安全を祈願する祭事“ホーランエンヤ”がある。大分県の選択無形民俗文化財で、「おおいた遺産」にも選定されている。

大漁旗や吹き流し、万国旗などで華やかに彩られた宝来船に締め込み姿の若者が乗り込み、豊後高田市の中心を流れる桂川右岸の玉津磯町から出発し、下流の琴平宮（金毘羅宮）に向かい、餅を供えた後に旋回して上流の若宮八幡神社を目指して、「ホーランエンヤエンヤサノサッサ」の掛け声とともに上げ潮に乗って漕ぎ上がる。船からは紅白の餅が撒かれ、川岸の観客から祝儀が差し出されると若者が厳寒の川に飛び込んで受け取りに行く。ちなみに、香川県の金毘羅宮の分社は出雲、神戸、松山、尾張（一宮市）、鳥羽、東京（文京区本郷）で、豊後高田市の金毘羅宮は東京・虎ノ門、下関などと同様に別の神社。

豊後高田市のホーランエンヤ（写真提供：PIXTA）

この祭りは、暦が干満と連動する旧暦の頃、元旦の行事であったが、現在では満潮の時間を考慮して日程が決められている。同名の祭事は島根県松江市と広島県尾道市にもあるが、松江市では 10 年に 1 度の城山稲荷神社の式年神幸祭に開催され、大阪天満宮（大阪市）の天神祭、厳島神社（広島県廿日市市）とともに日本三大船神事とされ、尾道市では高根厳島神社の管弦祭として毎年旧暦 6 月 17 日（平成 30 年は 5 月 4 日）に開催される。

豊後高田市は江戸時代、島原藩の領地で島原藩や同藩大坂蔵屋敷へ年貢米を廻送船で運んでいたが、ホーランエンヤはその航海の安全と豊漁を祈願する行事として江戸時代中期に始まったといわれる。「ホーランエンヤ」の掛け声と祭り名は、「宝来栄弥」、「蓬莱へ、蓬莱へ」という掛け声が変化したものだといわれている。（中島）